

病害虫発生予察情報（3月予報）

令和4年2月22日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (3月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	赤焼病	発生量：並 (発病葉数 0.3枚/1.25m ²)	2月上中旬発生量：並(一部多発生)(±) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	カンザワハダニ	発生量：少 (摘採面寄生葉率 1.0%)	2月上中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(±)
トマト	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率 8.9%)	2月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多 (発病株率 5.6%)	2月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 2.5%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 4.7%)	2月中旬発生量 黄化葉巻病：少(－) コナジラミ類：多(＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
たまねぎ	腐敗病	発生量：やや少 (発病株率 4.9%)	2月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.0%)	2月上旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 38.1%)	2月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(±)
いちご	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 2.8%)	2月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：並か多い(＋)
	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 1.2%)	2月中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率 1.0%)	2月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 11.1%)	2月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率 14.6%)	2月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.8%)	2月中旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【茶】

<生育の概況>

例年に比べ、寒害と思われる症状の発生は少なかった。

●赤焼病

予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、1ほ場で多発（25枚/1.25㎡）していたため、平均発病葉数0.54枚/1.25㎡（平年0.02枚/1.25㎡）と平年より多くなったが、他ほ場では発生は認められなかった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 幼木園や「つゆひかり」は特に弱いので発生に注意する。
- ・ 昨年発生が見られた茶園や常発茶園では、3月上旬に薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、1回目防除の20日後を目処に追加防除を行う。
- ・ 本病は、強風雨などで障害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は0.1%（平年0.4%）、裾部での平均寄生葉率は0.6%（平年1.5%）と、平年より少なかった。
- ・ 休眠調査の結果、越冬雌成虫は、調査時点で41.9%（平年74.1%）が休眠から明けており、産卵を始めている。1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。葉裏に薬液が十分届くように散布する。
- ・ 裾部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが摘採面に上がってくるようであれば早めに防除を行う。

<その他病害虫>

●チャトゲコナジラミ

- ・ 昨年チャトゲコナジラミが多発した茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。カンザワハダニとの同時防除を兼ねて、両種に適用のある薬剤を用いる。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように丁寧に散布する。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は5.8%（平年6.0%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で発生が増加するため、注意する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（例として、不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最少限にする）。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。薬剤耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
- ・ 発病した果実や茎葉の表面には病原菌の胞子が多量に形成されて伝染源となる。そのため、発病部位および残渣は速やかにほ場の外に持ち出して処分する。
- ・ 植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は14.3%（平年6.2%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で発生が増加するため、注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、抵抗性品種（*Cf-9*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率 0.3%（平年 2.7%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率 16.4%（平年 3.9%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並であるため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や、黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【たまねぎ】

<生育の概況>

低温・少雨の影響により、生育は約2週間遅れている。

●腐敗病

予報の根拠

2月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.6%）。

1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫時期を迎えているほ場では、できるだけ降雨の前に収穫し、降雨後は、鱗茎が十分乾いた後に収穫する。
- ・ 罹病株は、ほ場付近に放置すると発生源となるため、ほ場外に持ち出して処分する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

2月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.0%）。

1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する気象条件ではあるが、例年発生が確認されていない。

防除対策

- ・ 罹病株がある場合には、早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分することで来年度の伝染源にならないようにする。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 2月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は12.4%（平成34.1%）と平成より少なかった。
- ・ 2月17日発表の1か月予報では、気温はほぼ平成並、降水量は平成並か多い予報である。ただし具体的には、期間の前半は気温が低く、後半は高い見込みであるため、後半は本種の増殖が助長される。

防除対策

- ・ 収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。中～晩生品種が栽培されている、収穫まで期間を要するほ場では発生に注意し、密度が高まる前に薬剤防除を実施する。
- ・ 株元の葉と葉の隙間に多く生息しているため、その部分に薬剤がかかるように丁寧に散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風の無い時に散布する。

【いちご】

<生育の概況>

生育は地域によって異なるが、概ね平成並～やや遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.4%（平成1.2%）と平成より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平成並であり、降水量は平成並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生する。そのため、施設内の多湿や、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、ハウス内の除湿、結露防止に努める。
- ・ 曇雨天が続く場合は薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行うことでハウス内の湿度上昇を防ぐ。
- ・ 株の過繁茂は多湿による発生を助長し、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となる。下葉除去を適切に行うと同時に、伝染源となる発病箇所や不要な果梗枝は取り除き、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平成発病株率1.0%）。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平成並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、気温の上昇に伴い施設内は発病に好適な環境となりやすいため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難になりやすいため、ほ場での発生状況に注意し、発生初期に速やかに防除を行う。
- ・ 株の過繁茂は発生を助長させるため、下葉除去を適切に行う。果実での発生にも注意し、不要な果梗枝や発病果は速やかに除去する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年0.9%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・ 気温の上昇に伴い、再び病徴が進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する可能性がある。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.4%（平年4.7%）と平年より多く、多発ほ場も見受けられた。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ アザミウマ類は花への寄生を好む。花における発生状況を確認することで早期発見に努める。発生を認めた場合は直ちに防除を実施する。
- ・ 天敵を利用している場合は、ほ場で使用している天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- ・ アザミウマ類の増殖を助長し発生源となるため、必要のない花は摘花をする。また施設内外の雑草や花き類も同様に除去する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.5%（平年13.4%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ハダニ類の発生箇所が点在している場合は、発生箇所にスポット散布をする等、部分的な防除を行う。ただし、農薬の総使用回数に注意する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、物理的防除や天敵による防除を積極的に活用する。なお、物理的防除剤は殺卵効果、残効性が低いため、一度の散布ではなく5日前後の間隔で複数回散布する。
- ・天敵を利用している場合はハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。防除が不足している場合は天敵の追加放飼、または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、ほ場で使用している天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.1%（平年1.4%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アブラムシ類の発生に注意し、初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・アブラバチを利用している場合は寄生蛹(マミー)の発生状況を観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、ほ場で使用している天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

【稲】

<その他病害虫>

●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・いもち病は、本県ではMBI-D剤（ウィン、デラウス、アチーブ）耐性菌の発生事例がある。また、県内で発生は確認されていないが、他県ではQoI剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）耐性菌の発生が問題となっている。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・ スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

＜その他病害虫＞

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は54.8%（平年5.5%）、赤さび病の平均発病株率は17.2%（平年0.2%）と平年よりもかなり多かった。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。また、うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

【かんきつ全般】

＜その他の病害虫＞

●かいよう病

- ・ 伝染源となる夏秋梢の切除に努め、中晩柑類では3月の発芽前に薬剤散布による防除を行う。うんしゅうみかんで本病の発生が前年に見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。また、防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・ 農薬による防除については「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ <http://www.s-boujo.jp/>）」を参照する。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和4年2月17日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 2月19日から3月18日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間のはじめは気温が低く、その後は高くなり、期間の前半は気温の変動が大きいです。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、低い確率70%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率60%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	30	40
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	70	20	10
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月	:	2月19日(土)～	3月18日(金)
1週目	:	2月19日(土)～	2月25日(金)
2週目	:	2月26日(土)～	3月4日(金)
3～4週目	:	3月5日(土)～	3月18日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--